超能力は難しい

水城まりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超能力は難しい

【Ｎコード】
Ｎ３２９９ＢＡ

【作者名】
水城まりな

【あらすじ】
いつも通りの学校、いつも通りの幼馴染み。
平凡な日常を心地よく思っていた俺の前に現れたのは、『いつも通り』の日常には現れてはいけないような美少女だった！？
美少女は自分のことを超能力者だと言い、俺を連れ戻しに来たのだと宣言するが……？

プロローグ

「おかえりなさいませ、ご主人様」

学校から家までチャリで二十分。今日は全速力でチャリを漕いだから十五分。
いつもと違うのはその五分だけのはず、だったのに。

「なんだ、これ……？」

俺の目が確かならば。家のリビングに入ると、フリル付きの黒いメイド服に身を包んだ美少女がソファーから立ち上がって出迎えてくれた。おかえりなさいませ、なんてお決まりの台詞を言っている割には無表情だけど。
なんだ、これ？　どんな夢だよ。俺ってそんなに欲求不満だったのか？

「これは夢ではありませんよ」

俺が葛藤していると、美少女が一歩分だけ俺に近付いた。それに合わせ、俺は一歩分だけ美少女から後退る。
あれ？　俺、今……声に出してたっけ？　それとも夢だからなんでもアリなのか？
肩まで伸びた桃色の髪を持つ美少女は、黙り込んでいる（はずの）俺を見てゆっくりと瞬きをした。

「私はあの方と貴殿に帰還していただくために派遣されました」
「き、キカン？」
「えぇ、帰還です」

どこに？　俺の家はここだし……生まれたのもここだから、故郷だってない。
て言うか、こいつは何者だよ？　メイド服を着た役人か？　いやまさか、夢だからってそんなにぶっ飛んでいないだろう。

「……申し遅れました」
「は？」

どこからツッコんでやろうかと考えていると、美少女が深々と頭を下げてきた。

「国家直属のＡ級能力者特別部隊所属、キラ・ユイリと申します。リアス様には常々お世話になっておりました」
「そ、そうなんですか……」

またツッコむポイントが増えてしまった。
俺ってほとんどゲームしないし、読むのはバスケ漫画ぐらいなんだけどな……。なんでこいつはこんなにファンタジーな話をしているのだろう。
いや、ファンタジーってよりＳＦに近いのか？　超能力者とか言ってるし。よくわかんねーけど。

「自己紹介は終わりました。……さぁ、帰還を」
「ちょっ、ちょちょちょ……！」

謎の美少女――キラ・ユイリが一気に俺との距離を詰めてくる。
なんなんだ、なんなんだ！　女の子に詰め寄られるなら、こんなに無表情じゃなくてもっと愛嬌のある子の方がいいんですけど！

確かに美少女だけど……あああああ、意味わかんねー！

プロローグ（後書き）

無表情な美少女と、女の子に夢を見る思春期男子。
初作品です、よろしくお願いします！

家族

「お……れは……メイド、萌えじゃ……」
「紅葉（コウハ）？」
「わっ！」

いきなり耳元で名前を呼ばれて飛び起きると、紺のスーツの上にクリーム色のエプロンを付けた姉さんが不思議そうな顔をしてこっちを見ていた。頬にかかった髪を耳にかける仕草が妙に色っぽい。
……って、そうじゃなくて！

「ねっ、姉さん！　あれっ、美少女メイドは？」
「……疲れているの？」

呆れたように溜め息を落とされ、一気に顔に熱が集中したのがわかった。その顔を隠すように頭を抱える。
あぁ、わかっていたけど……。

「やっぱり夢だったのか……！」

どうやら俺は、家に帰るなりソファーにダイブして爆睡していたらしい。
恥ずかしくて身悶えていると、台所の方からいい匂いがしてきた。
独特な香辛料の匂いがふわりと鼻を刺激し、俺は確信する。

「……カレー？」
「ふふっ、残念でしたぁ。今日はただのカレーじゃないのよ」
「え？」

顔を上げると、ちょうどカレー皿を二つ持った姉さんが台所から出てきた。にっこり笑った姉さんの手によってテーブルに皿が並べられる。

……どう見てもカレーなんですけど。

「ほら、よく見て。今日は夏野菜カレーでーす！」

「え？　……あ！」

確かに姉さんの言う通り、そのカレーにはナスやらカボチャやらが浮いている。

……おいおい。もう秋だっていうのに、この季節感の無さはなんなんだ？

そんな俺の困惑なんて知るわけもなく子どもみたいに無邪気に笑ってみせた姉さんは、「紅葉も座りなさい」と右手をひらひらさせた。腹も減っていることだし、と渋々姉さんの正面に腰かける。

「それより紅葉、今日も部活だったの？」

「ん、まぁね。秋の大会が近いし」

俺の名前は高木紅葉。紅葉、と書いてコウハと読む。これは名前を付けてくれた父さんのこだわりだ。

高二になった今でこそからかわれることはなくなったけど、中学ぐらいまではそりゃもう酷いものだった。

考えてもみてほしい。「紅葉と書いてコウハと読みます」と自己紹介しただけで大爆笑されてしまう俺の心情というものを。

名前も捻くれているんだから本人も捻くれているに違いない、と根も葉もない自分の噂を聞いてしまった時の気持ちを。

負けず嫌いな性格が幸いして本格的なイジメにまで発展したことはなかったけど、俺は一度だけ父さんに聞いたことがある。
どうしてこんな妙な読み方の名前を付けたのか、と。

「お父さんな、漢字が苦手だったんだよ」

しかし両目とも金色の目を持つ父さんにそう言われてしまっては、俺はもうなにも言い返すことができなかった。
父さんの話を信じるならば、イギリス人と日本人のハーフらしい。
……ちなみに、俺はイギリスになんて行ったことがないから英語がペラペラ帰国子女ってわけではない。なんか損した気分だよなぁ。

「そう言えば紅葉、そろそろ誕生日よね？」

自分の英語の成績を思い出して嫌な気分になっていると、姉さんが不意に口を開いた。

「十七になるんだよね？」
「あ、うん」
「そっか。……早いなぁ」

俺が答えたのと同時に、感傷に浸るかのように目を細めた姉さん。
その表情を見て何故かドキリとした。

早いな、って。

それは単に俺の成長がってこと？　それとも……。

「母さんの命日も……もうすぐだよな」

「……そうね」

――母さんは俺を産んだ直後に死んでしまった。

そもそも俺は未熟児で生まれたそうで。今では後遺症もなく大好きなバスケができているけど、母さんはそうもいかなかった。母さんの命を優先して俺の命を諦めれば良かったのに。俺の誕生日、その日は同時に母さんの命日となってしまったのだった。そして、母さんのことをとても愛していた父さんも一年前に姿を消してしまった。外国で死んでしまった、と姉さんから聞いているけど真相はわからない。

「ところで紅葉、なにかほしいものはない？　一年に一回ぐらいは我が儘聞いてあげるけど」

しんみりした空気を変えるように、姉さんが取って付けたように笑顔を作って尋ねてきた。

一年に一回ぐらい、と言っても。姉さんにはいつも迷惑かけてばっかりな気がするしなぁ。仕事があるのに毎日ご飯作ってくれるし。俺はそれ以外の家事を担当ってことになってるけど、掃除も洗濯もまともにやった試しがない。大学を中退して働いてくれている姉さんのお陰でちゃんと高校にも行かせてもらってるのに、毎日迷惑をかけてばかりだ。

「……考えとくよ」

「わかった。遠慮しないでよー？」

軽く笑って言う姉さんに思わず嘆息する。

姉さんには敵わないなぁ……。今も、きっとこれからも。

「っと、うわ！」
「！」
ぼんやりしていたら、スプーンを握る右手がコップを倒してしまった。
急いでコップを立て直すけど、もう遅い。中に入っていた麦茶がテーブルクロスに染みを作ってしまっている。黄色が濃くなり、嫌な滲みを残していった。
「ちょっと、大丈夫？　ほら」
「あ、ありが、……っ！」
姉さんから布巾を受け取ったのと手の甲に痛みが走ったのは同時だった。
気付けば布巾はテーブルの上に落ちていて。あまりにも一瞬のことで、暫くなにが起こったのかわからなかった。
「っご、ごめんなさい……！」
姉さんの悲痛な叫びを受け、いつの間にか凝視していた布巾から目を離す。視線を合わせると、姉さんは折角のきれいな顔を歪めてしまっていた。
「ごめん、紅葉！　痛かったよね、ごめんね……！」
俺の手を必死に擦りながら、姉さんは泣きそうな声で謝罪の言葉を繰り返す。それを見つつ、俺はどこか他人事のように考えた。
――あぁ、またか。またあれか。

「いいよ、姉さん。こんなの痛くない」
「だけど、赤くなって……」
「いいから！」

声を荒げると、姉さんがびくりと肩を揺らした。その衝撃で手が離れる。
涙で潤んでしまった大きな目が痛々しく揺れていて、なんだかこっちが悪者になったような気分だ。

「……ごちそうさま。部屋、行くから」
「え、えぇ……」

――姉さんの暴力が始まったのは、つい最近のことだった。
昔から優しくて、どんなに怒った時でさえ絶対に手を出さなかった姉さん。そんな姉さんに初めて本気で叩かれ、最初はショックだった。だけどその理由がはっきりわかり、俺は以前ほど落ち込んでいない。

そう。姉さんは単純に、俺に触られるのが嫌なのだ。
理由はわからないけど、叩かれるタイミングがわかってからはなるべく姉さんに触れないようにしている。だけど、一緒に暮らしていればそれも限界があって。
しかも、さっきみたいに些細なことだったら咄嗟に姉さんに触れないように配慮するなんてできないし。

「なんなんだよ、いったい……」
自分の部屋のベッドに腰かけ、姉さんに叩かれた場所を擦る。

さっきは姉さんがいる手前痛くないと言ったけど、ほんとはまだひりひりしている。当然だ、本気で払いのけられたんだから。

「……」

叩かれた右手を天井に掲げる。指と指の隙き間から部屋の電気が差し込んできて少し眩しい。
だけどそんなことをしても痛みが和らぐわけはなくて、不意に泣きそうになった。

「なんなんだよ……」

きっと、俺が悪い。俺がなにかとんでもないことをしてしまったから、だから姉さんは俺に手を上げるようになったんだ。
もし本当にそうなら最悪なシナリオだ。俺にとっては唯一の肉親だっていうのに、その姉さんに嫌われているなんて。ほんとに、どこの三流ドラマだよ。
でも、それじゃあどうして姉さんは俺のことを見離さないんだ……？

「わかんねぇよ……っ！」

コンタクトを外し、今度こそ本当に寝てしまおうとぎゅっと目を閉じた。

超能力者

「おかえりなさい、おにーちゃん」

学校から家までチャリで二十分。今日は友達と一緒でゆっくり漕いだから二十五分。

いつもと違うのはその五分だけのはず、だったのに。

「なんだ、これ……？」

俺の目が確かならば。

リビングに入ると、黒のラインが入った白いセーラー服に身を包んだ美少女がソファーから立ち上がって出迎えてくれた。やっぱり彼女はやけに無表情だけど。

なんだよ、これ。昨日と同じ夢？　しかもこの女の子、格好は違うけど昨日と同じ子……だよな？

なんだ。俺、また家に帰ってくるなり爆睡しちまったのか？

「これは夢ではありませんよ。昨日も同じことを申し上げましたけれど。……人間は自分たちの常識で作り上げた科学というものを絶対だと信じていると教えられましたが、夢ならば科学を無視できるのですか？」

つーか、なんで俺の夢なのにこんな生意気な美少女が出現するんだ？俺の夢なんだったら……なんつーか、もうちょっと俺がいい思いできる夢にしてくれよなぁ。夢も現実も厳しいなんて辛すぎる。

「あのさぁ、夢なんじゃなかったらお前は不法侵入で捕まらなきゃなんないんだけど？」

とりあえず正論をぶつけてみれば、美少女は大きな瞳をぱちくりと瞬かせた。その瞳には表情という名の光がない。
しかし、睫毛と睫毛がぶつかる音が聞こえてきそうなほど彼女の睫毛は長かった。

「貴殿は知らなさすぎるのです」
「……は？」

美少女は自信満々に言い切り、一歩だけ俺に近付いた。大きな金色の瞳が俺を見つめる。
そこで俺は、その瞳が父さんのそれと全く同じ色をしていることに気付いた。そんな瞳で見つめられるとますます居心地が悪いからやめてほしい。

「昨日も申し上げましたが、特例が出ました。速やかにあちらに帰還していただきます。……王はよほど貴殿をお気に召しておられるようですね」
「は？」

こちら、だの。あちら、だの。
一体こいつはどこの世界の話をしてるんだ？　それに、帰還ってどこに……。

「……まさか」
「うおっ！」

警察を呼んだ方がいいのだろうかとぼんやり考えていると、美少女

が一気に俺との距離を詰めた。金色の瞳が目の前で瞬く。
冗談じゃなくて本気でキスでもされそうな状況に固まっていると、いきなり体中に痺れが走った。それは静電気なんて生易しいものではなくて。

「いてっ！」
「……やはり、あの方の力は侮れない」

美少女はまた俺から離れ、仕切り直すように咳払いをした。

「では、またお教えすることにしましょう。……私の名はキラ・ユイリ。A級能力者特別部隊の副隊長を務めております。かつては貴殿の父君が隊長を務めていた部隊です」
「え、父さんが？」
「はい」

やたら堅苦しい物言いだけど。
つまり、父さんの知り合いってことだよな？　なんとか部隊ってのがよくわからないけど、独特の風習があるのかもしれない。なにより瞳の色が父さんと同じだし、きっとイギリス人なんだろうな。

……ってこと、は。

「そっか、お客さんか！」
「は？」

言動がいちいちおかしいけど、わざわざ日本まで遊びに来てくれたってことだよな？

「すみません、なかなか気付かなくて。あ、どうぞ。お茶でも出しますので……」

イギリスから日本って何時間かかるのか知らないけど、とんでもなく遠いってことは確かだ。

もしかして父さんの居場所を知っているのかもしれない。教えに来てくれたのかもしれない……！

「知り合いだなんてとんでもない！」

「はい？」

お茶菓子なんてあったかなと考えながら台所に向かっていると、美少女もといキラ・ユイリがいきなり声を上げた。

え、なに。もしかしてこいつ、俺の心読んだ？

て言うか、今までで一番デカい声だったんですけど。……なんなんだ？

「私はずっとリアス様に憧れていました。いつか彼の元で力を使わせていただくのが夢でしたけれど、それは叶わず……」

そこまで語ったところで、キラ・ユイリははっとしたように頭を下げた。

「申し訳ございません。取り乱してしまいました」

「……リアス……？」

これも人の名前なのだろうか。

聞いたことがない単語のはずなのに、何故か胸の奥がざわついた。
遠い昔に鍵をかけたところを無理やりこじ開けられるようで気持ちが悪い。
呆然と立ち尽くしていると、キラ・ユイリは意を決したように目に力を込めた。

「単刀直入に申し上げます。リアス様……いえ。リアス・レイは、貴殿の父君にあたる方です」

……は？

「って、いやいや！　ちょっと待て！」
「どうされました？」
「俺の父さんはカタカナの名前じゃないっての！」

そこかよ！　とツッコまれそうだが、俺にとっては重要な問題だったりする。
だってさ、息子に偽名を使う親なんてこの世界のどこにいる？　行方不明なのか本当に死んでしまったのかすらわからないけど、高校生にもなったんだから偽名を使われていたらさすがに気付く。

父さんの名前は……えっと、なんだっけ？

「貴殿には理解能力が欠けているようですね」
「なっ……！」

未だに無表情を貫いている美少女は、こっちの気持ちなんて知らずにさらっと暴言を吐いてくれた。
心が読めるのはわかったけど、こいつには空気を読む能力っていうのが欠如しているらしい。もしかして心を読める代わりに空気が読

めなくなったりするんだろうか。

「話を進めます」

キラ・ユイリはやっぱり空気を読まずに、俺の思考を止めた。

「貴殿の父君は……リアス・レイは、いわゆる人間ではないということです」

「人間、じゃない……？」

「はい。彼は、あちらでも上級能力者という部類に入っていた超能力者なのです」

「……超能力者？」

真顔でとんでもないことを言われ、思いっきり笑いそうになった。

あー、危ない。なんだよ、やっぱりこれは夢なんじゃないか。

「あのさぁ……」

「はい？」

うっかり信じるところだった。

「高校生にもなってそんなこと信じる奴がいるとでも思ってんの？」

少なくとも俺の周りにはいない。

現実主義者だとか冷めているだとかではなく、もうとっくに割り切っているのだ。そんなものは空想の世界のものだ、と。

純粋に虹に感動していた頃があっても、虹ができる原理を知ってしまえばなんてこともない自然現象にしか見えなくなってしまったみたいに。

テレビで見る超能力者だとかいう人たちには、なにかトリックでもあるのだと勘繰ってしまうように。

「……空想ですか」

どこまで俺の心を読んでいたのかはわからないが、キラ・ユイリはぽつりとそう零した。

「そうですね。能力を持たない者から見れば我々の能力はただの空想にしかすぎないのかもしれません」

でも、と。彼女は自信満々に続けた。

「実際に目の前で御覧になればどうですか？」

「え……？」

なにを、と尋ねるよりも先にキラ・ユイリがずいっと顔を近付けてきた。またしてもあらぬ誤解をしてしまって反射的に目を閉じる。しかしそれは本当にただの誤解だったようで、すぐに瞼の外側が明るくなった。何事だと目を開けた瞬間、俺は考えることを忘れることになる。

「なっ……！」

そこに広がっていた世界は、正にファンタジーだった。

「サイコキネシス……です」

冷静に状況を告げたキラ・ユイリは、黄色っぽい小さな光の塊を包むように右手を広げていた。無表情のきれいな顔が照らされて軽く

ホラーだ。
ごくりとツバを飲み込むと、キラ・ユイリは右手を大きく振りかぶった。

「うわっ！」

それと同時に地震の時でも滅多に聞かないような地響きがして、さっきキラ・ユイリが座っていたソファーが一気に天井にぶつかった。天井を突き破るんじゃないだろうかというぐらいの音がして、睨むように張本人の顔を見る。しかし彼女はあくまで無表情を貫いていた。
不法侵入だけじゃ飽き足らず、こいつは俺の家を破壊しようとしているらしい。

「おいっ、お前……！」
「信じていただけましたか？」
「……は？」

何度も何度も天井にソファーがぶつかる。

「私は超能力者です。……そして、貴殿の父君も」

まるでこの家から脱出したいと言うように。
ここは自分がいるべき場所ではないのだと主張するように。

「超能力者と人間は、本来ならば相容れてはならない存在……。故に、その両者の間に生まれた貴殿は即刻始末されるはずでした。本来ならば存在してはいけないのですから」

忌々しげに呟いて、キラ・ユイリはやっとソファーを下ろした。地

響きのような嫌な音が消えてほっとする。

「しかし当時、リアス・レイはあちらでも敵う者がいない程の強大な力を持っていました。彼は自分と自分の周りを徹底的に防御し、我々の介入を拒んだのです」

金色の瞳が揺れ、俺を見る。俺の中のなにかを見つめ、なにかを軽蔑するように。

「……って、ちょっと待てよ！」

キラ・ユイリが作る独特のペースに巻き込まれそうになり、無理やり話をぶった切る。

そうだ、落ち着いて考えるんだ。仮にこいつが超能力者とかいうやつだったとしても、父さんや俺は関係ない。父さんが超能力者だっていう証拠はないんだから！

「証拠ですか？」

「そ、そうだよ」

なんとかキラ・ユイリの長い話を遮ることができて少しほっとする。たとえ俺が高校生でも、きちんと現実を見れている人間だとしても。こんなぶっ飛んだ話を長々と真面目に語られたら、うっかり信じてしまいそうになる。

……なんの遠慮もなしに心を読んでくることに関してはもうツッコまないことにしよう。

「わかっているのでしょう？」

「……！」

返事を待っていると、キラ・ユイリが低い声で唸るように言った。
「貴殿は優秀です。本当は全て理解しているのに、まるでそれに気付かない振りをしていらっしゃる。……何故です？　真実がただひとつの幸福だというのに」
真実が、幸福……？
「どうして……そう言い切れるんだよ」
「偽りは悪であるからです」
こいつが困る質問というのはこの世に存在しないのだろうか？
そう思ってしまうほど、目の前の美少女はテンポ良く答えを出していく。それはまるでなにも知らない純粋な子どものようであり、世界の汚れを知って悟りきった大人のようでもあった。
「……わかった、信じるよ」
「……」
本当はまだ全然信用してないけど、こうでも言わない限り話が進まないような気がしたから嘘をついた。
俺の心を見透かしている彼女にはそれがわかっただろうが、特になにも言われることはなかった。もしかして呆れられたのかもしれない。
「で？　父さんは……リアス・レイはどうしたって？」
話を進めるように促すと、彼女は僅かに眉を寄せてから小さく口を開いた。

「……結局、我々はリアス・レイをただ見守ることにしたのです。彼は自分の力を悪用するような馬鹿ではないと判断されたのでしょう。しかし我々は、ひとつだけ彼に条件を出しました」
「条件？」
「えぇ、そうです」

ゆっくりと俺に近付いてくるキラ・ユイリは、やっぱり無表情だ。もしかしたら彼女には表情筋がないのかもしれない。そもそも人間とは構造が違う、精巧に作られたロボットなのかもしれない。

そんな馬鹿なことを考えている内に、キラ・ユイリは俺の目の前までやって来ていた。

「女をとるか、子どもをとるか。どちらかを選べば今後の介入を完全に中止することを約束すると。……答えはおわかりでしょう。彼は貴殿を選び、貴殿の母君に当たる女性を殺したのです」

……え？

「キラ・ユイリ！」

なかなか言葉の意味を理解できずに呆然としていると、リビングのドアが開いて誰かが入ってきた。同時に目の前の美少女の名前が呼ばれる。
ふわふわする視界で背後のドアの前に経つ人物を捉えると、彼女は驚いたように目を見開いた。

「あんた……っ、紅葉になにを言ったのよ！」
「それではお二方、私はこれで失礼いたします」

「あ……ちょっとっ！」

彼女の、姉さんの言葉を無視してキラ・ユイリは一瞬で姿を消した。これは決して比喩ではない。彼女はなんの前触れもなく俺の前から姿を消し、目の前には姉さんが立っているだけとなったのだ。

「こ、紅葉。大丈夫？」

「……う、ん……」

肩を揺さぶってくる姉さんの問いかけになんとか頷くも、俺の思考回路はほぼ止まっていた。

だってあいつは、キラ・ユイリはなんて言った？

父さんが、母さんを。母さんを……。

「紅葉……？」

あぁ、そうか。それじゃあもしかして、本当に夢じゃなかったのか？メイド服は俺の趣味じゃなくて、実際にあいつが着ていて。それなのに記憶が曖昧なのは、きっと……。

「……なんでもないよ、姉さん」

超能力のせいだ。

「そ、そう？　顔色が悪いけど……」

「だーいじょうぶだって！」

俺の頬に触れようとした姉さんの右手を避けるように、かつ自然に距離を置く。

ほら、いつも通り。これが俺と姉さんの円満家族生活の基本。

「ねぇ、姉さん。今日の晩ご飯は？」

「え？　あぁ、今日は……」

だけど今日、俺は気付いてしまった。どうして姉さんが俺に触れることを嫌うのかを。

姉さんは俺が憎いんだ。母さんを殺す死んだのは俺のせいだから。

だから憎くて、触れたくもなくて……。

「紅葉、ちょっといい？」

「え？」

エプロンを付けて台所に入ったはずの姉さんがリビングに戻ってきた。

ソファーに座ってぼんやりしていた俺は、その声に反応して腰を上げる。視線を合わせた姉さんはいつになく真剣な顔をしていて、まるで誰かに鷲掴みされたように心臓が痛んだ。

「ごめん。まだ……まだ、なにも知らないでいて」

「……っ……！」

金縛りにあったように身を硬くすると、姉さんが不意に俺の顔の前へ掌を突き付けてきた。それに対してリアクションをとる暇も与えられずに、俺の意識は深く沈み込んでいってしまう。

「ねぇ。――は、魔法使いなんでしょう？」

まるで歌うように質問すると、彼女の側で分厚い本を開いていた青年が顔を上げた。

「違うって。俺は魔法使いじゃなくて――なんだよ」

「あぁ、そっかぁ。そうだったねー」

「おい、真面目に聞いているのか？」

「聞いてる、聞いてる！」

漆黒の長い髪を揺らし、彼女はくすくすと小さく笑った。小鳥が囀るようなくすぐったさに、眉をしかめていた青年も表情を緩める。

「ねぇ、それならこの子も――になるのかしら？」

僅かに膨らみを感じる自分の腹部をそっと撫で、彼女は青年を見た。青年は斜め上に視線を投げて思案してから、またすぐに彼女へ視線を戻す。

「そうだな、その可能性は高いかもしれない。あっちの研究ではまともな結果が出ていないからなんとも言えないけど」

「そっかぁ。……ふふっ、楽しみ。もしこの子が――になったら、楽しい家族になるんでしょうね」

「……そうか？」

「そうよ、きっと！」

彼女は美しく、気高い。まるで幼子をあやすように語りかけてくるのに嫌悪感がないのは、彼女が常に相手の瞳の奥にある真意を見出そうとするからだ。

「大好きよ。――、ずっと一緒にいてね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3299ba/

超能力は難しい

2012年1月9日02時45分発行